慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中村菊男教授の業績
Sub Title	
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.8 (1977. 8) ,p.98- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770815-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中村菊男教授の業績

中村勝範

『中村菊男先生――その人と業績――』（昭和四十八年七月十五日　東京菊友会発行　利光三津夫編集）という本文一〇四頁の書物がある。その約三分の二頁にわたり、教授の業績が記録されている。それによると、教授は御逝去される約四年前において、すでに左のごとき業績をあげられていた。

単行本	四二冊	共編者	六三冊
翻訳	四冊	パンフレット	八六冊
学術論文	七六篇	評論	四七九篇
随想	六九篇	座談・対談	一三三回
書評	三五篇		

昭和五十年六月十日の時点で、ワシントンにあるアメリカの国会図書館の索引カードには「NAKAMURA KIKUO 中村菊男」のカードは六十五枚あった（拙稿「故中村菊男教授の業績」三田評論　昭和五十二年八月号）。教授の膨大な学問的業績は大別し、三分野に分類することが可能であろう。㈠政治学、㈡日本政治史、㈢政治的実践、の分野である。それぞれの分野の業績を一瞥する前に、教授を考える前に忘れることのできない重要な条件が一箇存在することを指摘しておきたい。それは教授が、政治家の家に生まれ、育つたということである。祖父は三重県会議員を二期つとめた。父もまた同県会議員であり初代鳥羽市長をつとめた人である。教授自ら戦後第一回の総選挙に立候補し、終生与野党の一流政治家と交流した。こうした背景と条件は教授の学問的個性をも決定した。

㈠　政治学。教授の処女出版は『政治学』（世界書院　昭和二十三年九月）である。改訂版、全訂版を含めて、慶應義塾大学における教養の政治学のテキストとして約十年間使用されたものであるが、教授は「晩年」この書を好まれなかつた。「本書は概論の性質上従来の政治学と大率同様の体裁を整へた」（序）ところに一半の理由はあつたと思われるが、さらに別の理由として、これが生きた政治に触れていないという点にあつたのではないかと思われる。『政治学』後約半年にして『政治心理学』（世界書院　昭和二十四年四月）が出版された。教授をして政治心理学研究の方向に向わせたのは故板倉卓造教授の御示唆によるらしいが、教授の生い立ちからしても机上の政治学から、人間に内在する複雑な心理にまで立ち入つて政治を研究しないではおれない必然性があつたように思えてならない。教授

は処女作からちょうど十年後に『現代政治の実態』（昭和三十三年十二月　有信堂）を出版されるが、これは『政治学』、『政治心理学』を綜合し、あわせて後述する現実の社会運動の研究を導入したものである。『政治学』は従来の政治学と大率同様であり、静態的政治学であったのに対し、新著は現実の政治の「実態」に力点をおいて著作されたものである。「政治学」という文字を冠した教授の最後の政治学書は『政治学の基礎』（昭和四十二年四月　有信堂）であるが、そこには、「政治学の研究にいちばんいい方法は、自分みずからが政治の実践に携わることである。この方法をとれば直接の見聞を通じて、経験的事実を入手しうる。（中略）本書においては、抽象的な論議をできるだけ避けて、現実の日本の政治に即した内容のものを紹介し、現実的・具体的な立場からの政治へのアプローチをこころみたい」（三三頁）と書かれている。抽象的議論を避け、現実の政治に即した政治学が、中村菊男政治学の個性であった。

(二)　日本政治史。教授の政治学は、すぐれて政治の現実に則したものであったが、それは教授の政治史研究に裏打ちされてもいた。『日本近代化と福沢諭吉』（昭和二十四年十一月　改造社）がこの方面の著作上の出発点である。『明治的人間像――星亨と近代日本政治――』（昭和三十二年十一月　慶應通信）、『伊藤博文』（昭和三十三年七月　時事通信社）、『星亨』（昭和三十八年二月　吉川弘文館）といったいずれも明治時代の人物を中心として日本近代史に光をあてたものから、『昭和政治史』（昭和三十三年一月　慶應通信）、『満州事変』（昭和四十年二月　日本教文社）、『日本政治史読本』（昭和四十一年六月　東洋経済新報社）等がある。教授は日本の政治史を研究する場合、欧米の学者がつくりあげた近代史についての方法論をそのままあてはめることに大きな疑問をいだいておられた。たとえば、明治維新について考える場合、フランス革命と比較してそれはブルジョア革命でなく不徹底であったという議論があるが、フランスやヨーロッパをモデルにして、日本の不徹底を論ずるという見方をとられなかった。文化は国により異るものであり、人間の行動と思考様式もまた多様であるという考え方が教授のものであった。この史観に立ち研究されたものが論争的な『近代日本の法的形成』（昭和三十一年二月　有信堂）であり、『天皇制ファシズム論』（昭和四十二年九月　原書房）、『嵐に耐えて――昭和史と天皇――』（昭和四十七年四月　PHP研究所）である。最後の二著は、「天皇制ファシズム論」批判であり、一言でいって戦前の昭和時代を「ファシズム」ないし「天皇制ファシズム」の時期とする多くの説に対して、わが国にはそのようなものは存在しなかったということを立証されたものである。われわれの時代の多数派説に挑戦して、独自の見解を鮮明に打ち出された教授は、むろん

奇を衒うわけではなかつた。教授が主張したことは、この世に存在し、出現するものは、他と同一でない、個有なるものであるということである。ここで通用したものが、他の場所では通用するとは限らないということである。

㈢　政治的実践。ここでいう政治的実践とは、教授が政治に参加する中で残された著作のことである。『民主社会主義の理論』（昭和二十七年二月　青山書院）、『民主社会主義の思想』（昭和二十七年十二月　青山書院）を出版された頃すでにして、教授はこの方面の研究のリーダーであり、両著書出版後の教授は現実の政治、社会主義・労働運動方面に多大な影響をあたえるようになつた。『松岡駒吉伝』（昭和三十八年八月　経済往来社）、『戦後民主的労働運動史』（昭和三十九年五月　日刊労働通信社）等がこの方面の研究線上にある。教授はさらに外交、防衛、憲法、教育等をめぐる諸問題にも多くの著作をされ、これらの問題について与野党の政治家及び政府当局者との間に密接な関係を持たれた。この分野の生きた研究と、研究のために政治家と接触したことが、教授の政治学を実践的かつ実証的性格を一段と帯びさせることになつた。

以上の三分野にわたる研究を集大成したものが、『日本的リーダーの条件』（昭和五十年四月　PHP研究所）であり、『政治文化論』（昭和五十一年二月　東洋経済新報社）である。教授は『政治文化論』の「序文」において、「日本の政治学者が日本の政治について、マス・コミから受ける知識以上に、その実態について知らないこと」が不満であるとされた。「平常の政治学の研究のかたわら、政治評論をしている学者にしても、どれほど政界と接触し、政治家と意見交換をしているか疑問としたい。日本の政治学者にして、つねに国会や政党本部にあらわれ、直接・間接政治にタッチしたり、あるいは選挙の際、候補者の応援のために動きまわる人はあまりいないのではないだろうか」と言われた。まことに教授は、産湯につかつたその時から他界されるまで、政界と密に接触されていた。そのことを土壌とされて中村菊男政治学は大成された。